平成３０年度 月刊 サイ 校長通信４号

（生徒・保護者版） Ｈ３０.７.２４（７月号）

俊英NOW

「俊輝祭」入賞企画特集

最優秀賞　演劇部「６人の職員たち」
　オリジナル脚本の完成度と演技力を評価
優秀賞　２年２組「森のパンケーキ」
　ケーキと店内レイアウトの工夫を評価
優秀賞　軽音楽部
　オリジナル楽曲への挑戦を評価
特別賞　ダンス部
　ダンスのキレと圧倒的集客力を評価
特別賞　２年４組「巨大迷路」
　スペース利用の独自アイディアを評価
特別賞　３年１組「台湾便當中華店」
　メニューの旨さと店の雰囲気を評価
（スリムクラブも「うまい！」と言ってた。）

終業式の話　「清水さんはもう助かりません。」

かつての教え子のブログを紹介したいと思います。ブログの主は「清水いのり」といいます。彼女のブログは実名で書かれていますので、あえて実名をあげさせてもらいます。清水いのりさんは富山大学卒業後、某出版社に勤めていました。私はたまたま、この出版社が出している世界史資料集の編集に係っていて彼女と再会しました。ところがその後、いのりさんは不幸にも直腸ガンを発症し、２００８年（平成２０年）１２月１日、２７歳で息を引き取りました。ブログというのは直腸ガンの告知を受けた７月４日の記述から始

まり、彼女の死を告げる彼氏と思われる人の記述で終わっています。ここで紹介するのは、告知を受けたときの記述です。

ブログ『健康マニア』より（部分）

〇２００８年８月３０日の記述

「告知」

すべての検査結果が出揃ったのは金曜の夕方。診察室には、外科医、看護師、母、私。「非常に厳しいことを申し上げなければなりません。非常にシビアな結果です。清水さんはもう助かりません。」こんな切り出し方だった。

直腸癌の場合、自覚症状を感じる頃は末期の可能性が高いことや、地を這うような生存率のグラフが思い出された。ステージ４。もう終わりだ。だけど隣には母。娘に先立たれるという不幸をいきなり背負ったこの可哀想なおばさんを私は慰めにゃならない。

と思ったら、末期がんですか、リンパへの転移もあるんですね、で、治療方針は？ ちなみに今後のライフプランの参考に、〇年後に〇％とかいう生存率も聞かせてください……、などという言葉が次から次と。非常に気丈な患者さんを演じてしまい、居合わせた緩和ケア担当の看護師さんから、とてもしっかりなさっているけど大丈夫？泣いてもいいのよ、と心配される始末。これがいわゆる告知でした。

母親は当然ショックを受けたけれど、その場で泣かせずに済んでよかった。だけど、彼氏への電話報告のときは、さすがに泣いた。私、もう助からんって。もうだめやって。と、富山弁で富山在住の彼に。伝えると同時に、受話器から号泣の応酬。・・・・・(中略)・・・・・・・・７月４日（金）のことでした。

〇２００８年８月３１日の記述

「余命」

（前略）・・・・次の日、彼氏が駆けつけてくれるまで、私はもう死ぬと思っていました。もう、思い出作りかな、と甘えようとする私の相手をしてくれず、「がんを治した人はおるんや。俺は絶対に諦めん」と、「末期がんからの生還者」とかいうサイトを熱心に閲覧する彼。私が諦めたらこの人が可哀想だ。私は諦めちゃいけない。

とくにしたいことのなかった私は、生きることにしました。

そう思ったらひたすら情報が欲しい。がんを治す方法はないのか？医療関係者をはじめ、何か知ってそうな友人・知人に電話をかけまくる。

ここから、私のがんの恐怖への反撃が始まります

清水さんは、2008 年 12 月 1 日に永眠しました。告知の５ヶ月後のことです。ブログにある「わたしは生きることにしました。」という言葉の重さに私は圧倒されます。しかし思えば、人間いつかは死ぬのです。「人間は、死刑判決受けていて今は執行猶予状態にあるだけだ。」とどこかで聞いたことがあります。（黒澤明の映画『生きる』のセリフだったような）私たちの残された時間は清水さんより多少長いかもしれませんが、長短を別にすれば、清水さんと私たちは何も違ってはいません。このことを実感してこそ、私たちは生きていることの本当のかけがえのなさ、そして有り難さがわかるのではないでしょうか。